

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	楚辞集注の「忠君愛国」について
Author(s)	藤原, 尚
Citation	中國中世文學研究 , 63-64 : 1 - 19
Issue Date	2014-09-29
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051446">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051446</a>
Right	
Relation	



# 楚辞集注の「忠君愛国」について

藤原 尚

一 離騷は経なのか  
朱子は楚辞弁証で、離騷経について次のように述べる。

離騷経と名づけられるわけについて、王逸は「離は別、騷は愁、経は径である。言うところは、己（屈原）が放逐せられ離別し、心中愁思するも、道径によつて王を婉曲に諫めること」とするが、この説は正しくない。史遷（司馬遷）、班固、顔師古の説が正しい。

朱子の拠る所は、王逸の離騷経章句の序文に加えられた、洪興祖の補注であろう。それには、

太史公曰く、離騷は、なほ憂ひに離るがごとしと。班孟堅曰く、離はなほ遭のごとしと。己の憂ひに遭いて辞を作るを明らかにするなり。顔師古云ふ、憂ひ動くを騷と曰ふと。按ずるに、古人 離騷を引き

て未だ経と言ふ者あらず。蓋し後世の士 其の詞を祖述し、之を尊びて経と為すのみ。屈原の意に非ず。逸の説 是にあらず。

とあるが、朱子は、王逸の「離騷」の解釈に触れているだけで、洪興祖の「経」に対しては言及していない。ただ、朱子の楚辞弁証の目録に、

洪氏の目録の九歌の下の注に、云ふ。「一本 此の下に皆伝の字あり」と。晁氏本は則ち九弁より以下、乃ち之有り。呂伯恭、読詩記に鄭氏の詩譜を引きて曰く、『小雅十六篇、大雅十八篇を正経と為す』と。孔穎達曰く、『凡そ書 正経に非ざるものを、之を伝と謂ふ。未だこの伝 何れの書にあるかを知らず』と。按ずるに、楚辞 屈原の離騷を之を經と謂ひ、宋玉の九弁より以下を皆 之を伝と謂ふ。此の例を以て之を考ふれば則ち六月以下は、小雅の伝なり。民勞以下は、大雅の伝なり。孔氏 凡そ正

経に非ざる者を之を伝と謂ふと謂ふは善し。又未だこの伝 何の書に在るかを知らずと謂ふは非なり」と。然れば則ち呂氏は実に晁本に据りて言ふも、但 洪、晁二本 今亦た 未だその的据を見ず。更に當に博く之を考ふべきのみ。

とある。朱子は、経については、王逸の注を取らず、洪興祖の補注で述べる説をとる。すなわち、後世の人が、祖述しこれを尊んで経とした、というのである。しかし、それも暗黙のうちに受け入れていたに過ぎず、洪興祖、晁補之の二本に確かな証拠が見られないので、広く考えなければならぬという。

屈原については、いろいろな観方があるが、司馬遷は、史記、屈原伝で「屈原は 正義と直行で忠直を尽し、智恵を絞って君に仕えた。讒人が離間させたが、切羽詰つたといえよう。信実にして疑われ、忠直にして悪し様に言われた。どうして怨まずにいられようか。屈原の離騷は、怨みから生まれたものである」という。更に淮南王安の見解を引き「国風 色を好みて淫せず、小雅 怨誹して乱れず」を受け入れている。経書の伝統を受け継ぐ作品として評価したものであるが、「色を好む」「怨み誹る」など、人間の素朴な情を認める。また、離騷以下、彼の作品を読み、その志を悲しみ、彼が身を投げた場所に行き、涙を流し、その人となりを想い起した、という。ただ、賈誼の「屈原を弔らう文」を読み、あのような才

能を持つて諸侯へ身を寄せたら、どんな国でも容れられるだろうと惜しみ、あのような最期を遂げたことを不審に思っている。彼の死については、謎の部分があるということである。

後漢の班彪は、司馬遷の史記の創作態度について、黄老を尊び五経を軽んじ、仁義を卑しめ、貧窮を恥じたと批判する。その子、班固もその思想を受け継ぐ。若い頃、東平王蒼に手紙を送り、蒼を周公旦と並び称え、「昔は周公、今や將軍、未だ此を三にする者あらざるなり」と言い、六人の人士を推薦するが、その規準は経学であった。その手紙の末尾に、「靈均（屈原）は、忠誠を尽し、終に身を沈めた」といいながら、「屈子の篇、万世 善に帰す」とも言う。「仁は善行の長」と言われるから、班固はこの時点では、儒学の立場から屈原の行動を、後世の師表と考えていたのであろう。後に章帝が即位し、班固は、さきに劉向が経書を校合して、十六巻としたものの中、賈逵とともに、見る所をもってさきの疑問を改め、各々が離騷経章句を作ったといわれる（王逸、離騷経後序）。今それを見ることは出来ないが、洪興祖の補注には、離騷の序文を載せる。屈原の人となりについて、

今 屈原のような人物は、才能を露骨に表し、自己を称揚し、小人たむろする亡びかけた国で争い、陷害を受けた。しかし、懷王を責め、子蘭、子椒を怨み、考え苦しんで憂鬱になり、じこまでも在位の

人を非難し、わが意見が容れられないのを怒り怨んで、江に身を投げて死んだ。これも、同じく、志は高いが、潔白に過ぎ、行為がなげやりの人である。

と批判する。では班固の理想とする行動とはいかなるものか。孔子が論述したものを踏襲する。「潜龍 是とせられずして悶えず—(易乾、初九)のように、世間から非難されても悶え苦しまず、道を守り、抜くべからざるものがあることを良しとした。国に道がなければ時政に関与せず、柔順で人と逆らわなかった蘧遠(論語、衛靈公)、「その知は及ぶべきも、その愚は及ぶべからず」と嘆称された甯武子(論語、公冶長)を挙げるが、いずれも智恵によつて身を全うしている。また、離騷そのものについても

崑崙、冥婚(異類妖怪との婚姻)、宓妃などの実在しない語を多く用いるが、すべて礼法の基準に則り、経書の道理を載せるものではない。これを詩の風雅を兼ね、日月と光を争うというのは、ほめ過ぎである。

と、淮南王安、司馬遷の、離騷に対する評価を見直すべきだという。

王逸は、離騷経の後序で、反論する。

臣下として守るべき道は、忠正を尊いものとし、節義の為に死ぬことをすぐれたものとする。だから身の危険を畏れずに直言して国を保ち、身を殺して仁を成すのである。この故に伍子胥は、殺されて江に投げられたけれども恨まず、比干は、胸を切り裂かれても悔いなかった。その後、君に仕える道が立ち、君に尽す行いが成り、榮譽が顕れ、名声が揚がる。あの道徳を心の内にしまひ、国家の将来を迷わせたり、愚者といつわり、先方の僭越を許したり、倒れば救うことが出来ず、危うければ安んずることが出来ず、素直にお上に従ひ、逡巡して禍を避けるような生き方であるならば、たとい八十才になり、百才の長寿を得たとしても、志士の恥じる所、愚夫の賤しむ所である。

として、蘧遠、甯武の生き方を取らない。王逸が拠る所とするのは、「志士仁人は、生を求めて仁を害することなく、身を殺して仁を成すあり」(論語、衛靈公)である。邢昺の疏には、伯夷、叔齊、比干のような人がこれに当るといふ。殷の紂王の時、微子(紂の庶兄)は去り、箕子(紂の諸父)は奴となり、比干(紂の諸父)は、諫めて殺された。孔子は、「殷に三仁あり」と言う(論語、微子)。疏では三人は行ふ所は異なるが、同じく仁と称しているのは、乱を憂え民を寧んじようとしたからだといふ。孔子は、乱において必ず身を犠牲にすべきで

あるとは説いていない。

班固は、屈原を聖人とは考えなかったが、王逸の離騷經前序と後序について見れば、離騷にすべて經の字がつけられていて、先に述べたように、經を道徑とは解し難く、王逸自身も、聖人の書と考えていたのではなからうか。後序で、武帝が淮南王安に離騷經章句を作らせたところがあるが、この經には疑義がある。「劉向が經書を典校して、分けて十六卷とした」とあるから、その時に離騷を經とし、他の楚辞の作品を伝としたことは推測できる。

劉向、劉歆が作成したといわれる「七略」の儒家者流には、「文を六經の中に遊ばせ、意を仁義の際に留め、堯舜を祖述し、文武を憲章し、仲尼を宗ぶべき師とし、以て其の言を重んず」とあり、全くとは言えないが、離騷に重なるところもある。離騷を儒家として考えていたのではあるまいか。

題目として、「離騷經」とするのは、王逸の単注本として、明の萬曆十四年刊本がある。九歌以下「伝」をつけるが、十二、十三の「弔屈原」、「服賦」は、新たに入れられ、「伝」をつけたい。洪興祖補注がある四部叢刊本（明繙宋刻本影印本）では、離騷經第一とし、下に、「釋文第一 經の字無し」とある。九歌第二の下に「一本 九歌より九思に至る、皆 伝の字有り」とある。

朱子は楚辞弁証上、目錄で

洪氏は更に「今本では、九弁は第八であるが、釈

文では第二としてゐる」と言うが、思うに、釈文こそが古本に依つたものであろう。後人が始めて作者の前後の順序により列べたが、それがいつ誰がしたかを言わない。今考えてみるに、天聖十年、陳説之の序では、旧本の篇第は雜り乱れ、首尾が誤り違つており、はじめてその人の前後を考え、重ねてその篇を定めた、とする。してみると、今本は、説之によつて定められたのであろうか。

と言う。朱子は「思うに釈文こそが古本に依るのだから」と言うが、四庫提要では、

洪興祖の考異では、離騷經の下注に、「釈文第一 經の字は無い」と曰うが、逸注には、明らかに「離は別なり、騷は愁なり、經は徑なり」と云えば、逸が注した本には確かに經の字があつて、釈文本と同じではない。必ず釈文が旧本であると謂うのも信じられない。しばらく、その説を残すのが良い。

と述べ、必ずしも經をつけた本が間違ひとはいきれないという。王逸の離騷經後序を見る限り、先にも述べたように、劉向が經書を典校し、楚詞を十六卷とし、後漢の章帝のとき、班固、賈逵が離騷經章句を作り、その他の十五卷が抜け落ちて説かれなかつたので、王逸が旧章と引きくらべ、經伝に合して十六卷を作るというから、

注は注として、離騷を經として尊崇していたのは事実と考えられる。

朱子自身も、離騷を經とするには、いささか抵抗があったのではあるまいか。楚辭集注八卷の序文に、

原の人と為りは、その志行が中庸より過ぎて、人の道とすべきでない所があるが、すべて忠君愛国の誠心より出たものである。原の書は、言葉の趣意が、ほしいままに不可思議で、怨みがはげしく、起るにまかせ、人の教えとすべきではないが、忘れられず悲しみ悼み、こらえきれない真情より生じたものである。北方に学び、周公、孔子の道を求めることを知らなかつたが、ひとり変風、変雅の末流に駆け廻つた。

とある。中庸を踏まない為、人となりと書の両方とも、人の教えとするに値しないというのが、離騷序に於いては、班固が過賞と評した淮南王安の批評を受容すると同時に、宋の景文公の言も取る。淮南王安は、屈原の志行に關して、「濁り汚れた世間より超然と抜け出し、塵や埃にまみれた社会の外に遊び、世の中の濁った垢に辱められず、さつぱりとして泥をかぶつても汚されない。この志を推し量るに、日月と光を争うとしても良い」と潔白孤高の態度を評価するが、伯夷、叔齊をイメージするものがある。王逸は、離騷經、後序で、「昔、伯夷、叔齊

は国を譲り本分を守り、周の俸禄を受けず、そのまま餓死した。どうしてまた、世間に求めることがあり、怨み思うと考えられようか」と屈原の志行を伯夷、叔齊の態度で説明する。朱子が淮南王安の説を引くのと同じ意図であろう。

さらに朱子は、宋祁<sup>4</sup>の言を取る。

離騷は、詞賦の祖であり、後人はこれを模仿するも、至方は矩を加えることは出来ず、至円は規を越えることが出来ないのと同じである。

と、離騷は、詞賦の極致であるという。これは、孟子、離婁上で、「孟子曰く、『規矩は方円の至なり。聖人は人倫の至なり。君為らんと欲すれば、君の道を尽し、臣たらんと欲すれば、臣の道を尽す。二者 皆堯舜に法るのみ』と」に由る。詞賦を賞めると同時に、臣としての道を尽した人物として評価もあると考えられる。では、さきの、班固が指摘した、虚無の語を用い、礼法の道に背くという非難に朱子はどう答えているか。朱子は、離騷經序の後に、注として、彼の離騷についての考察を載せる。先ず詩の六義に対して深く知ることが肝要として

詩を論ずる者は、先ずこの事（詩の六義）を識別すれば、詩經三百篇は、綱が綱に在るようにしつかりと保たれ、筋道が通つて乱れない。ただ詩經だけ

でなく、楚人の詞もこれで求めると、その情を草木に託し、意を男女に寄せ、物見遊山の快適を極めるのは、変風の流れである。事を叙べ、情を陳べ、今に感じ古を懐い、君臣の情を忘れないのは変風の類である。男女の神々の婚姻を語れば、礼を越え、怨みや憤りをのべて中庸を失うのは、風雅の再変である。その神を祭る盛大な歌楽を語るのは頌に近く、その変は甚だしい。

というが、変風、変雅について、最初に述べているのは、卜子夏の毛詩序である。それらが起るのは、王道が衰微し、礼義が廢絶し、政教が失われ、諸侯の国々で異なつた政治を行い、人民の家々で違つた風習に染まるやうになつた時である。班固は、西都賦の序で、「昔 成・康没して頌声寝み、王沢渇きて詩作らず」と述べ、成王、康王の代より後は、詩は亡びたとし、変風、変雅については述べない。鄭玄は、詩譜序で、風に周南、召南、雅に鹿鳴、文王の類があり、成王、周公が太平をもたらし、誉め称える声が興り、隆盛の極みであつたが、文王、武王の徳に由るもので、これを録して正經とする。変風は、懿王が斉の哀公を煮殺し、夷王が礼を失ひ、邶では賢を尊ばなかつたことより始まり、厲王、幽王の代になり、周の王室が大いに壞れ、十月之交、民勞、板、蕩などの詩が作り、東周五覇の末より綱紀が乱れ、陳の靈公の事で終わるといふ。詩のよろしき道を用いなければ、斉の

哀公、陳の靈公のように、劫殺されたり、大禍に遭つたりするので、吉凶の由る所、憂娛の兆候がここに在り、後王の根本とするに値すると言ふ。朱子の詩經集傳序に於いては、変風の視点が鄭玄のとは異なる。

雅の変に及んでも、亦當時の賢人、君子達が、時世を憂え俗世間に苦しい思いをして作つたもので、聖人がこれを採択した。その物事に忠実に取り組み痛み悲しむ心や、善を述べ悪を防ぐ志などは、とりわけ後世の雄弁家達の及び得る所ではない。この詩が、經とされるのは、人のつとめるべき事が、下人民に広く及び、天の道が、上 為政者に備わり、世の中の道理がすべて具わっているからである。

変風の詩も、詩經の中に採用されているのは、その詩人達が、国家の危急に際し、善を求め悪を防ぐ心を出し、人事、天道に関わる世の中の道理を具えていると朱子は考へるが、屈原の離騷も、変風、変雅とし、更に再度、變の甚だしいものとしながらも、詩經の流れを汲むものとすれば、離騷を經として尊崇していることになる。王逸本の「離騷經」を単に受け継いだものではなく、朱子自身の明確な考へを表現したものである。

## 二 王注と朱注の一致点

朱子の離騷序は、王逸の離騷前序を、大体において踏

襲しているといえるが、なぜ汨羅に身を投げたかについては、見解を異にする。

屈原放在草野、復作九章。援天引聖、以自證明。終不見省、不忍以清白久居濁世、遂赴汨淵、自沈而死。  
(王逸、離騷前序)

屈原 放たれて草野に在り、復た九章を作る。天を援き聖を引き、以て自ら證明す。終に省みられず、清白を以て久しく濁世に居るに忍びず、遂に汨淵に赴きて、自ら沈みて死す。

屈原復作九歌・天問・九章・遠遊・卜居・漁父等篇、冀伸己志、以悟君心、而終不見省。不忍見其宗國將遂危亡、遂赴汨羅之淵、自沈而死。  
(朱子、楚辭集注、離騷經序)

屈原 復た、九歌・天問・九章・遠遊・卜居・漁父等の篇を作り、己の志を伸し、以て君が心を悟らしめんことを冀ふも、終に省みられず。其の宗國の將に遂に危亡せんとするを見るに忍びず、遂に汨羅の淵に赴き、自ら沈みて死す。

王逸のは、「援天引聖」とあるが、天の神は明察で、えこひいきすることなく、徳を輔け悪を去らせるから、

屈原は誓いを立て、もしわが行動が邪であれば、天罰が下る筈とし、また、過去の聖人たちに、彼の言の正直かどうかを平正させるのである。忠直が容れられず、清白な資質に濁世の塵埃を受けるに忍びず、汨淵に投じたとするが、憂愁や悲憤の心情を重く受けとめている。

朱子のは、「伸己志、以悟君心」で忠君を示し、「不忍見其宗國、將遂危亡」で愛国を表わし、彼が楚辭集注序で述べた「忠君愛国」と一致する。王逸も、九章の序では、「思君念国」と、「忠君愛国」に近い語は発している。

朱子の離騷注では、忠君愛国を意味する箇所は、王逸注、洪興祖の補注を、そのまま受け継いでいる。

懷王が盛壯の時に当り、屈原は聖王の道に導こうとするが、讒人が仲を裂き、国家の行く末を案ずる。

惟黨人之偷樂兮、路幽昧以險隘。  
豈余身之憚殃兮、恐皇輿之敗績。  
(離騷)

党人の偷かりそめに楽しむを惟ただふに、路 幽昧にして以て險隘けんわいなり。豈 余が身の殃わざわいを憚おそらんや、皇輿の敗績を恐る。

朱子は、次のように解釈する。

君車宜安行於大中至正之道、而當幽昧險隘之地、



則敗績矣。故我欲諫爭者、非難身之被殃咎也。但恐君國傾危以敗先王之功耳。 (離騷經第一、注)

君の車は、大きくて、この上もない公正な道をゆつくりと行くべきである。しかるに奥深く暗く、陰しく狭い地に当れば、転覆する。だから己が、面を犯して君を諫めるのは、わが身が災いを受けるのを恐れるわけではない。ただ君王と国家が危うくなり、先王の功績を敗ることを憂慮するからである。

前半は、洪興祖の離騷經章句補注の「皇輿宜安行於大中正之道、而當幽昧險隘之地、則敗績矣」(皇輿は宜しく大中正の道を安行すべし。而るに幽昧險隘の地に当らば、則ち敗績せん。)を取り、「皇輿」を「君車」に変えるのみである。

後半は、王逸の離騷經章句注の「我欲諫爭者、非難身之被殃咎也。但恐君國危以敗先王之功。」(我の諫争せんと欲するは、身の殃咎を被るを難かるにあらず。但だ君國危くして以て先王の功を敗るを恐るればなり。)に、最後に「耳」をつけ加えたに過ぎない。王逸、洪興祖が解釈する、屈原の「君を思い、国を憂う」精神を、朱子も受け継いでいる証拠であろう。

王逸は、「離騷」の文で、詩に依って象徴的意味を取り、同じ仲間で比喻する。だから、善鳥、香草を忠貞に当て、悪禽、臭物で讒佞に喩え、靈修、美人を君に比する」と

いうが、朱子は、以上のことを適切であるとする。屈原が、江離 芷(よろいぐさ)、蘭などの香草を佩びるのを、王逸は、徳を象徴するもので、多くの善を取り、修行することと解釈する。

余既滋蘭之九畹兮、又蕙之百畝。  
畦留夷與揭車兮、雜杜衡與芳芷。

(離騷經章句第一)

余 既に蘭の九畹を滋え、又蕙の百畝を樹う。留夷と揭車とを畦にし、杜衡と芳芷とを雜ぶ。

**王注** わが輩は、追放させられても、多くの香草を植え、仁義を修行し、勤勉努力して、朝暮怠らない。多くの善を積み重ね、わが身を清潔にし、また留夷、杜衡を植え芳芷を雜え、芳香はますます暢び、徳行はいよいよ盛んである。

**朱注** わが輩は、多くの香草を植え、仁義を修行し、自ら清潔に飾り、朝夕怠らない。

洪注は、語句の解釈に止まるが、朱注は、王注を踏まえ、簡にして要を得ている。多くの香草を植えることは、仁義を修行し、朝夕怠らないことを意味する。仁義は儒者の代表的な徳目であり、わが身を修養して、天下に広

める意義を持つ。朱子は、「忠君愛国」を説くが、この仁義の解釈を取っている。次の例も、仁義として解釈する。

曾歎歎余鬱邑兮、哀朕時之不當。

攬茹蕙以掩涕兮、霑余襟之浪浪。

(離騷章句第一)

歎きよ歎きよを曾もとねて余は鬱う邑れひ、朕が時の当らざるを哀しむ。茹蕙を攬とりて以て涕を掩ひ、余が襟を霑ぬして浪浪たり。

**王注** 我累息而懼、鬱邑而憂者、自哀生不當舉賢之時而值菹醢之世也。己自傷放在草澤、心悲泣下、霑濡我衣、浪浪而流。猶引取柔荑香草、以自掩拭、不以悲故失仁義之則也。

わが輩が、息を殺してこわがり、心が結ばれて心配するのは、生きては賢人を挙げる時に当らず、殺されて醢しひにされる世に遭ったのを哀しむからである。追放され草沢の間に居り、心悲しみ涙下り、はらはらと上着を霑ぬおす。それでも柔い香草を抜き取り、わが目を掩い拭い、悲哀の故に仁義の則を失わない。

朱注では、歎歎を哀泣の声とし、「我累息而懼、鬱邑而憂者」を、「哀時不當者」(時の当らざるを哀しむは)とし、更に傍線以外の箇所を省略する。「悲しみの故に、仁義の則を失わない」というのが趣意である。龍逢、梅伯が菹醢にされる時のような悪世に生まれ合わせても後悔せず、国の為を思う心志に対し、仁義の則を失わないと称える。

王逸が仁もしくは仁義について言及しなくて、朱子が補足して述べたものもある。小人が、わるがしこく人を陥れ、君王は、奢りたかぶり、言説がとりとめのない状態で、屈原はあくまで善を守り、清白を貫こうとする場面である。

屈心而抑志兮、忍尤而攘詬。

伏清白以死直兮、固前聖之所厚。(離騷經第一)

心をま屈まげて志をおさへ、尤とがを忍んで詬はをのぞく。清白に伏し以て直きに死せば、固より前聖の厚くする所。

**王注** わが心志を押えつけ、一切の罪過をこらえ受けて去らなかつたのは、恥辱をとり除き、讒佞の人を誅すること、孔子が少正卯を誅したのと同じようにしたいと思つたからである。清白の志を心に留めて忘れず、忠直の節に死する男児があれば、勿論、前代の聖王によって厚く哀しまれる。だから、武王

が紂を伐つた時、比干の墓に土を盛り重ね、ありがたい言葉を加え、商容の村里の入口の門に石を立てて、その善行を明らかにした。

**〔朱注〕** 我輩は、世間と同じでないから、ただ、心を屈し志を抑えなければならぬ。恥辱を受けることがあっても、理を以て解決し、これを押しつけ、胸中に受けないようではなくてはならぬ。思うに、むしろ清白に服して直道に死にたい。それでさえ、前の聖人に厚く哀しまれるに値する。比干が諫死して、武王がその墓に土を盛り、孔子がその仁を称えたように。

「孔子が、その仁を称えた」と朱子が解するのは、洪興祖の補注に、「比干諫而死、孔子稱仁焉、厚之也。」（比干諫めて死す。孔子仁と称して、之を厚くするなり）を取り、王注に重ねている。朱注は、人の道を説くだけでなく、屈原の君国に対する熱情を強調する。比干の行為が仁であれば、方向性を同じうする屈原のそれも仁となる。

ただ、仁に行き着くには、同じではない。「屈心而抑志兮、忍尤而攘詬」について、朱注と王注は異なる。王注は穿鑿して儒家的であるが、朱注は字句通りに取り道家的である。離騷の他の箇所でも、讒人に対して怒髪天を衝く憤りが往々にして見られるのに、ここだけ時勢に

順い理に従う、大人しい屈原と捉えるのは如何であろうか。この事については後に考えるところとして、朱子はここで王注に対して批判している。

旧注（王注）が、「攘詬」（詬を攘く）を「除去恥辱、誅讒佞之人」（恥辱を除去し、讒佞の人を誅す）と解するのは、間違っている。かの讒人は、今時に遭い、要路に居て政権を専らにし、この吾（屈原）は、罪を以って官職を取り上げられ追放せられ、これから先の罪、ほかの責めを免れれば、もう十分であるのに、どうしてかの讒人を除くことができようか。この説を考えたものは、時勢も識らないようであるが、その志も深く憐れむべきである。

（楚辞弁証、離騷経）

王逸が明言せず、朱子が仁義と確言している箇所がある。離騷の最終章「乱曰」のすぐ前の文である。

陟陞皇之赫戲兮、忽臨睨夫舊鄉。  
僕夫悲余馬懷兮、蜷局顧而不行。

（離騷）

おほそ、ひかりかたや、  
皇の赫、戲けるに陟陞り、忽ち夫の旧郷に臨み  
睨る。僕夫悲み、余が馬懐ひ、蜷局り顧みて行かず。

天界の遊行の最後の場面であるが、虚構の世界である。

崑崙山に升起、不周山を過ぎ、西海を渡り、九韶を舞い、天帝の宮廷に昇り、光輝に身を寄せても、憂いを解くに十分ではない。

**[王注]** 屈原設去世離俗、周天币地、竟不忘舊郷、忽望見楚國、僕御悲感、我馬思歸、蜷局詰屈而不肯行、此終志不去、以詞自見以義自明也。

屈原は、世を去り俗を離れ、天を周<sup>めぐ</sup>り地を回るとを、かりに設けても、最後まで心は旧郷を忘れず、ふと楚國を望見し、御者は、心を動かして悲しみ、わが馬は帰ろうとし、体が曲がつて、行くのを聞き入れない。此は最後まで志が残り、文章を以てその志を表わし、よろしき道を以て明らかにしたものである。

**[宋注]** 屈原托爲此行、而終無所詣、周流上下、而卒反於楚焉。亦仁之至而義之盡也。

屈原は、名君を求めることを口実にして、この天界の遊行を試みるが、最後まで行き着くところがなく、上下あまねく回つて、終に楚に帰つた。これもやはり、仁の至り、義の極みである。

揚雄や班固は、天界の遊行を虚として非難するが、王

逸は屈原が名臣を求め、憂國の志を持ち続け、文章に表現したことにより行為で示したのと同じであると同評する。朱子は、屈原が、明君を求めて天界に遊び、最後に楚を離れることが出来なかつたのを、仁義と称える。忠君愛國に通ずるもので、王逸の見解と方向性は同じと考えられる。

### 三 王注と朱注の相違点

孔子は「怪、力、乱、神」を語らなかつたといわれる。朱子は、その章句で、「鬼神造化の道は、正しからざるに非ずと雖も、然も理の窮むる至りに非ざれば、未だ明かにし易からざる者有り。故に亦た輕輕しく以て人に語らざるなり」といい、怪・力・乱とは別に、理が極め尽されて居らないので、軽率に人に語ることが難しいという。楚辞、九歌は人と神との愛を詠じたものである。朱子は、王逸の考えを受け入れ、楚國南部の村里や沅水・湘水の間では、その風習として鬼神を信じ、祭りを好み、その祭りに、必ず歌謡と音曲とを作り、鼓を拍ち舞を舞い、諸神を楽しませたと述べる。歌舞の音楽に於いて、その詞が粗野であるので屈原が作り直したというが、朱子は、一歩進めて、巫と陽神、覘と陰神との間で、慣れあなどる言葉がないことはあり得ず、これを屈原が更定したという。何を表現したのかに就いては、両者は異なる。

**王注** 上陳事神之敬、下見己之冤結、託之以風諫。

上では神に仕える恭敬を述べ、下では自己の無実の罪で、心が結ばれるのを表わし、これに託して諷諭する。

**宋注** 又因彼事神之心、以寄吾忠君愛國眷戀不忘之意。是以其言雖若不能無嫌於燕昵、而君子反有取焉。

また神に仕える心に因つて、わが忠君愛國の思慕の情を寄せたものである。この故に、その言は馴れ親しむ嫌いが無いことはあり得ないようであるが、逆に君子はこれを取る。

表面で、神に仕える恭敬を述べるとすると同じであるが、王注は自己の無実の罪で憂鬱になり、これに託し諷諭するが、悲憤怨恨の情が色濃く表わされる。朱注は、わが忠君愛國の真心を寄せるとし、忠誠思慕の情が述べられているとする。朱子は九歌の序の注で王逸の九歌の解釈を非難する。

此卷諸篇、皆以事神不答而不能忘其敬愛、比事君不合而不能忘其忠赤、尤足以見其懇切之意。舊説失之、今悉更定。

此の卷の諸篇は、皆 神に仕えて答えられないのに、その敬愛を忘れることが出来ないことを以て、君に仕えて入れられなくても、その赤誠の心を忘れることが出来ないことに喩えている。とりわけ、その懇切な情を見るに十分である。旧説は間違っている。今、悉く改定する。

詩経の賦・比・興の修辭法に則つて作られた九歌に、それを無視した王逸の解釈を批判する。

九歌、東皇太一では、主祭者と巫が、吉日良辰を扱び、齋戒沐浴して身を清め、祭壇を設け、音楽を演奏して神の降るを待つ。神は巫に降り、ゆつたりとくつろがれる。

靈偃蹇兮姣服。芳菲菲兮滿堂。

五音紛兮繁會。君欣欣兮樂康。(東皇太一)

神は降り、巫は姿や服、ともに美しく、良い香は馥郁として堂に満ちる。五音は入り交じつて調和し、太一の神は非常に喜ばれ、楽しみ安んぜられる。

また、雲中君では、蘭の湯に浴し、よういぐさ 芷で髪を洗い、五色の衣をまとい、美しく着飾つた巫に、雲神(雲中君)は降り、長く留まる。にわかに遠く雲中に拳がって行く。

覽冀州兮有餘。橫四海兮焉窮。

思夫君兮太息。極勞心兮慄慄。(雲中君)

望むところは、冀州だけでなく他州を含み、四海をほしいままにして、きわまるところが無い。かの雲神を思つて太息し、憂心を極め悲しみ傷む。

朱子は、楚辞弁証上、九歌で、王注と洪注について次のように批判する。

東皇太一、舊説以爲原意謂人盡心以事神、則神惠以福、今竭忠以事君、而君不見信、故爲此以自傷。補注又謂此言人臣陳德義禮樂以事上、則上無憂患。雲中君、舊説以爲事神已訖、復念懷王不明、而太息憂勞。補注又謂以雲神喻君德、而懷王不能、故必以爲憂。皆外增贅説、以害全篇之太指、曲生碎義、以亂本文之正意、且其目君不亦太迫乎。

東皇太一は、旧説(王注)では、「屈原は、このように考えた。人が心を尽して神に事えると、神は福を恵んで下さる。今我は忠を竭して君に事えても、君は信用してくれない。だからこの為に悲しみなげく」のごとく解釈する。補注では、更に「人臣が徳義、礼楽を陳べて上に事えると、上には内憂外患が無い」と解する。雲中君は、旧説では、「屈原が雲神に事え、十分に尽すが、復た懷王の不明を思い、

ため息をつき、憂い悲しむ」とし、補注では、更に、「雲神を以て君徳に喩えるが、懷王にはそのような徳がない。だから、心に憂いを抱く」とする。皆外より無用な説を増し、曲げてくだくだしい意味を与え、本文の正意を乱している。その上、君を指すことが、近すぎるのではなかるうか。

朱子は、また、東皇太一、雲中君の題跋でも同じ解釈態度を取る。

主祭者が、誠を竭し礼を尽し、以て神に仕え、神が喜悅し安寧が保たれることを願い、人臣が忠を尽くし力を竭して、君を愛して已むことのない情を寄せる。全篇が比である。(九歌、東皇太一)

神が降り、長く留まり、人と親しく応対される。だから立ち去られた後も、思つて忘れることができない。臣が君を深く慕う情を表したものである。(九歌、雲中君)

朱子は、文脈に即して解釈をし、君臣の義を出す時は、国の安寧を願っている。だから屈原の悲憤憂鬱の情を抑えているのではなかるうか。全篇神に仕えることを比とし、君に疏遠にせられても、愛撫已むなきの情を卑近な言葉で表すことにより、「忠君愛国」の意がこもると考

えたのであらう。

九歌、湘君の例では、もつと明確に示される。王逸は、湘君を湘水の神（舜）とし、朱子は、堯の長女娥皇を指すとする。祭祀を設け、巫に湘君を招き呼ばせるのは、王逸は屈原であり、朱子は主祭者である。香潔な桂舟に乗り、洞簫を吹いて、湘君の気を引き、飛龍に乗って北に征く。（ここで、王逸注は、湘君を思うことを終え、懷王を思うことに変わる）洞庭湖の近道を選び、涪陽の遠い水辺を望み、大江を横切つて、精誠を揚げる。

桂櫂兮蘭楫。斲冰兮積雪。采薜荔兮水中。搴芙蓉兮木末。心不同兮媒勞。恩不甚兮輕絕。

（九歌、湘君）

桂の櫂か、蘭の楫か。氷をきり、積雪のよう。薜荔ていかりずを水中に採り、芙蓉を木末に採る。心が同じでなければ、仲人は疲れ、恩がひどく篤くなければ、軽々しく離絶する。

湘君と巫もしくは主祭者の関係であるが、王逸は、屈原と懷王の事にすぐ結びつける。裏ではその事を意味していても、表ではそれで解釈しないと筋が通らない。朱子は、ただ迫るとしている。また、「恩不甚兮輕絶」について、「我は君と同姓にして、祖先が同じなので離絶の道はない」との説を持ち出すのも、文意に乖くとい

う。

朱子によつて、先に引用した部分の意味をとると、

舟に乗り、ひどい寒さに遭い、氷をきり、みだれて雪のようである。舟は芳潔であり、事は苦勞が多く、前へ進むことができぬ。薜荔は木に頼るが、今それを水中に采ろうとする。芙蓉は水中にあるが、今それを木の梢に求める。その場所がないのだから、いくら力を尽しても手に入れることはできない。結婚しようとしても、心が異なれば仲人が疲れて、それは成立しない。友達になろうとして、交際が疏遠であれば、今は成つていても、終には離絶し易い。なれば心や志がそむけば、無理に合わせられないという証拠である。神を求めて答えられないというのは、やはりこのようなものではなからうか。

となる。湘君の末尾には、

捐余玦兮江中、遺余佩兮醴浦。采芳洲兮杜若、將以遺兮下女。時不可兮再得、聊逍遙兮容與。

余がおび玉を江中に捐て、余が佩玉を醴水のみぎわに捨てる。香草の生えている中洲より杜若を採り、今それを侍女に送ろうとする。時はもう二度とは得られないから、しばらくゆったりとして遊ぼう。

とある。王注の解釈は、次のようである。

我は、追放されているが、いつも君を思い、たと  
い遠くに行くにしても、玦佩を捨てて水辺に置き、  
君が来られて我を求め、都へ還す意を示されるのを  
切に望む。我は芬香がすぐれて、他と異なる中洲の  
杜若ぢやうがを採り貞正の人に贈り、志を同じうして最後  
まで変わらないことを願う。天の時は、もう二度と  
は得られず、人の歳も二度とは盛んにはならない。  
我は年老いてしまった。時勢にも恵まれなかった。  
しばらくゆつたりとして遊び戯れて、天命の至るの  
を待とう。

朱子は、王逸の解釈を誤りとし、次のように述べる。

(主祭者は) もはや湘君を見ることが出来ず、愛  
慕の心はいつまでも忘れられない。だから、やはり  
その玦佩を解いて贈物としたいが、思い切つてはっ  
きりと持つて行きその身に当てることをせず、ただ  
これを水辺に委ね、棄てて落し亡くしたようにして、  
こつそりとわが意を寄せて、湘君がひよつとすると  
取つて下さることを強く願う。……中略……また  
香草を侍女に贈り、好みを通じたいとの心をわから  
せ、玦佩が収められるのを願う。恋慕の情がこのよ

うであつても、まだ必ず出来るとは限らないので、  
ゆつたりと遊んでこれを待ち、いつまでも忘れるこ  
とは出来ない。

朱子は、また、湘君の題跋で次の如く述べる。

此篇蓋爲男主事陰神之詞、故其情意曲折尤多、皆  
以陰寓忠愛於君之意、而舊說之失尤甚。今皆正之。

この篇は、思うに男主(覲)が女神に事える詞で  
あろう。故に心持ちは曲折することがとりわけ多く、  
すべてひそかに君に忠愛である意をことよせている  
が、旧説の間違ひはひどい。今すべてこれを正す。

と全く旧説はとらない。確かに朱子のは明晰である。  
だが、忠君はわかるにしても、愛国とどう結びつくので  
あろうか。

#### 四 洪興祖の補注の役割

屈原の事迹は先秦の書では、これを記して居らず、賈  
誼の「屈原を弔う文」に、始めて見える。司馬遷の史記、  
屈原伝は、淮南王安の離騷伝に依り、これを述べ、その  
事の次第を深く究めなかつたのではないかと思われる。  
それは楚辞と合わないところもあるが、九章は事をはっ  
きりと述べ、屈原の実録というべきもので、屈原の末期



の心情に触れることができよう。

王逸は、九章の序で、「屈原放於江南之野、思君念國、憂心罔極。故復作九章」（屈原 江南の野に放たれ、君を思ひ國を念ひ、憂心極まり無し。故に復た九章を作る）というが、朱子は、「思君念國」は取る。「忠君愛國」に通ずるものがあるからだろう。「憂心罔極」は、直接その表現は取らないが、九章の末尾にある「惜往日」、「悲回風」の二篇について、臨終の言で、いきどおり、不平が抑えきれず、悲哀を極めるといふ。また、「己の陳ぶる所の忠信の道は甚だ著名なり」の忠信の道は、朱子は取らない。別の視点より、人君たる者、屈原の作品をよく読み、政治に役立てるべきだといふ。

王逸が、忠信の道が著明であるといふのは、忠信が、儒家の重要な徳目となつてゐるからである。九章、惜誦の最初に、「所作（作、朱子は非に作る）忠而言之兮、指蒼天以爲正」（作す所、忠にして之を言ふ。蒼天を指して正と爲す）とあるに就いて、王逸は、

己所陳忠信之道、先慮於心、合於仁義、乃敢爲君言之也。設君謂己作言非邪、願上指蒼天使正平之也。

我が述べる忠信の道は、先ず心でよく考え、仁義に合して、はじめて思い切つて君に申し上げるものである。もし君がいつわりを言うと思われるなら、どうか、上蒼天の神に平正ならしめよ。

とする。忠という語が出れば、忠信とし、更に仁義を加えて解釈する。朱子は、忠を原義で「まごころ」とか、「誠を尽す」という意で解する。「所非忠而言之兮」について、「もし我が言葉が 中心より出たものでないのに、あえてこれを出すのであれば」とし、心でこらえて憤懣やる方なく出されたとし、忠信の徳から出たものとは解さない。また、同じ惜誦に「吾誼先君而後身兮羌眾人之所仇」（吾 誼として君を先にして身を後にす。ああ、衆人の仇とする所。）とあるが、誼について、王注では、

我輩が忠信・仁義を修め守つてゐる理由は、誠に先ず君父を安んじ、その後にはじめて自分の身に及ぶ。ああ、それが衆人によつて仇とされる。

と、「忠信仁義」を以て解とする。朱子は、「誼は義なり」として解釈を加えない。それは字義通りに解釈せよということ、義は、人としてふみ行うべき道を意味する。

天命についても、九章、懷沙の「乱曰」において、「萬民之生（朱子は、民生稟命に作る）各有所錯兮、定心廣志、余何畏懼兮。」（萬民の生、各々錯る所有り。心を定め志を広め、余何をか畏懼せん）とあるについて、王逸は、萬民が天命を稟けるが、我（屈原）は忠信に安

んじているから、志意を広くして懼れることはない、行動の規範を忠信に置く。しかし、朱子は、「民が命を天より稟けるのは、その気の短長厚薄に随つて、さまざまに分れるが、置くところが定まらうて易えることはできない。君子が患難に処す場合は、必ずその心を定めて外物によつて動揺されないようにさせ、必ず志を広くし、些細な事によつて狹隘されないようにさせる」とし、屈原自身の志行によつてきまるといふ。また、同じく懷沙で、死の問題にも触れる。「知死不可讓、願勿愛兮。明告君子、吾將以爲類兮」（死の讓くべからざるを知らば、願はくは愛むなからんことを。明らかに君子に告ぐ、吾將に以て類を為さんと）とあるが、王逸は、人は命が終わろうとする時には、忠を建て、節に伏し、義に死すべきで、どうかそれを避けて惜しむことのないように」と君子一般のこととしているが、朱子は、洪興祖の補注の説を取る。「死の避けられないのを知れば、生を捨てて義を取るのがよろしい。悪む所が死より甚だしいものがある。どうして、また七尺の軀を惜しむことがあるうか」である。洪興祖が由る所は、孟子告子上に、「生も亦た我の欲する所なり。欲する所、生より甚だしきもの有り。故に苟も得るを為さず。死も亦た我の悪む所なり。悪む所、死より甚だしきもの有り。故に患も辟けざる所有り」と述べる所である。朱子は、洪興祖の説を容れるが、それは、屈原自身の考えを重視したからと考えられる。

懷沙の「乱曰」の少し前に、「重仁襲義兮、謹厚以爲豐。重華不可遷兮、孰知余之從容。」（仁を重ね義を襲ね、謹み厚うして以て豊と爲す。重華遷ふべからず、孰か余の從容を知らんや）とあるが、王逸は、屈原が仁徳と礼儀を重ね、行いを修め善を謹み、自らを広めていゝが、重華に会うことが出来なければ、誰が我の挙動が忠信を行うことを知ってくれようか、と解する。朱子は語の解釈に止まるが、從容は挙動が自ら樂しむとする。自ら樂しむ心境は、汨羅に身を沈める直前の作品と見られる九章、思美人にも見られる。

吾且儻儻以娛憂兮、觀南人之變態。  
竊快在其中心兮、揚厥憑而不埃。

芳與澤其雜糅兮、羌芳華自中出。（思美人）

吾 且しほら儻たちもと儻とおりて憂ひを娛み、南人の態を變ずるを觀る。竊ひそかにその中心に在るを快び、厥い憑じよりを揚げて埃ほこたず。芳と沢 其れ雜糅し、羌 芳華中より出づ。

離騷では、江離、芷、秋蘭などは善の象徴として身に佩びたことは前に述べたが、それは、善を外より求めたことである。挫折したけれども、それにもめげず、喜びを感じているのは何故か。王逸は、詩文を作ることによる、名声を得るからとするが、朱子は異なる。さきの文

を、朱子は、

しばらく、またゆつたりとして憂いを忘れ、世の移り変わりを観る。その中から得たものを楽しみ、憤りを舒べて 外に待つところが無いから、よい香り（道德）は内より出て、はじめて美を外物に借らなくなつた。

といい、君国に身を捧げることを喜んでいると解する。それは、洪興祖の意見が影響しているのではなからうか。楚辞後語、反離騷の注に、洪興祖の論を引いている。

或る人が問うて言つた。古人は、「其の身を殺して君に益があれば、これをする。」といつたが、屈原が死んでも、懷王・襄王にとつて何の利益があるのか、と。答えて言う。忠臣が心を使うのは、自ら君を愛する誠を尽すだけである。死生毀譽を顧みないところである。故に比干は諫言を以て殺され、屈原は追放を以て我が身を沈めた。比干は紂の諸父（天子の同姓の諸侯）であり、屈原は楚の同姓である。人臣たる者は、三べん諫めても従われない時には去る。同姓には去る道がない。死あるのみ。離騷に、「余が身を危くして死にかかったが、さきに世の節に伏した賢人を観て、やはり後悔しない」とあるから、屈原自身が決断したことは、はつきりしてい

る、と。

洪興祖は、更に、屈原は比干のように、あくまでも君と争い、強く諫めて死する機会を得なかつたが、懷王が心を動かし行いを改めることを切に望み、後世屈原の態度を聞く者をして、追放され廃斥せられても、その君を愛し、恋慕して忘れず、君子の道を十分尽したことを知らしめた、とし、忠君愛国の精神を評価する。朱子は、これに則つたと考えられるが、全部承認しているわけではない。屈原の細行を観るに、聖賢の法則に合わせる、と、すでに、すべてが中庸に合しているとは言えないと嘗つて言つた通りだとし、落度がないわけではないという。更に洪興祖が、屈原を三仁（比干、微子、箕子）に比したことに對し、父師（箕子）少師（比干）は諫言によつて殺され、捕えられたのであり、屈原のように、わざと生を捐てて死に赴いたものではないと比干と一緒に論ずることはできないとしている。

しかし、屈原のしたことは、過ぎた所はあるが、世間の生を偷み死を免れようとする者の及ぶべき所ではないといひ、揚雄、班固、顔之推の意見には同調しない。

朱子の実証主義を信奉し、朱子の年譜を作成した、清の学者、王懋竑は、「忠君愛国」について少し疑問を抱いている。もし懷王が秦に拉致せられ、客死させられた事実を、屈原が知つていれば、国家の危亡が目前であるから九章で必ず天を呼び号泣して当然なのに、それに一

言も及ばないのはどうかといぶかり、更に讒諛嫉妬の害を嘆息するだけで反復して涙を流し、心にまつわり乱れたのは一身の故ということになり、忠君愛国の意は、少し弱められる、という。ただ、これは朱子が、史記、屈原伝を過信したのを批判したと考えられる。

### 注

(1) 楚辞弁証 朱子が、王逸・洪興祖の楚辞注を集め、字句の解釈・文意以外に知らなくてはならぬものを述べている。

(2) 晁氏本 晁補之の「續楚辞」、「變離騷」を指すと考えられるが、今は伝わらない。晁補之、字は無咎。伝は、宋史四百四十四に在る。

(3) 呂伯恭、誦詩記 呂氏家塾誦詩記卷十七、正小雅に出る文を引く。呂祖謙、字は伯恭。伝は、宋史四百三十四に在る。

(4) 宋祁 宋の人。字は子京。諡は景文。引用された文が、彼の文集の何処にあるか、不明。伝は、宋史二百八十四。

(5) 忠君愛国に通ずる 朱子は離騷において、王注の仁義と解くところを、そのまま受容して、忠君愛国の意と一致させている。王注では、「字は仁義を崇び、長幼を序する所以なり」とか、「青帝の舎に至り、万物始めて生ずるは、皆仁より出で、復た瓊枝を折りて、以て佩に続け、仁を守り義を行ひ、志いよいよ固し」、「衆人 財利に急にして、我独り仁義に急なり」などあるが、朱子は取らない。ただ、遠遊篇では、離騷と同じく天界を遊行して、楚国に臨んだと

き、全く王注を用いる。「屈原謂へらく、身を修め道を念ひ、仙人に遇ふを得、与に俱に遊び、万方を周歴して、天に升り雲に乗り、百神を役使するに託するも、樂しむ所に非ず。猶ほ楚国を思ひ、故旧を念ひ、忠信を竭して以て国家を寧んぜん」と欲す。精誠の至り、徳義の厚なり」である。王注は、その序では、「忠信の篤、仁義の厚なり」とするが、朱注の「忠君愛国」と全く一致する。

(6) 白田雜著、書楚辞後